

1 学校教育目標
学び ふれあい 伸びゆく芙蓉 ～小中一貫教育の実践を通して～



2 学校経営ビジョン	
めざす学校像	・ 知・徳・体の調和のとれた学校 ・ 楽しさ、元気、創造力に満ちた学校 ・ 地域に信頼される学校
めざす教職員像	・ 使命感に燃え、情熱あふれる教師 ・ 教育の動向を見据え、授業力向上をめざして研鑽に励む教師 ・ 児童生徒愛に満ち、一人一人を大切にする教師 ・ 小中学部の教育活動を協働で行う教師
めざす子ども像	・ 「立腰」をはじめ基本的な生活態度・学習態度を身につけた子ども ・ 学ぶ楽しさ・おもしろさを味わい、確かな学力を身につけた子ども ・ 社会性や倫理観など豊かな心をもった子ども ・ 郷土の歴史や文化に学び、異文化に触れ、生き方を追求する子ども



3 本年度の重点目標	4 前年度の成果と課題
①学力向上 ・ 主体的な学習態度の改善と思考、表現力の向上を図る ②小中一貫した生徒指導と社会性の育成、およびキャリア教育の充実 ・ 出会いの一礼、感謝の一礼、立腰教育などを通して基本的な生活態度や心の教育を図る ・ 社会的・職業的自立に向けて必要な意欲・態度や能力を育成する。 ③開かれた学校づくり ・ 校舎一体型一貫校における文化的で安全な学習環境づくりを行う ・ 小中一貫校の先進校としての自覚を持ち、育友会や公民館、幼保育園との連携を深め、保護者・地域との信頼関係の構築と情報発信を行う	・ 学校教育目標、学校経営ビジョン、さらに重点目標3項目を受けて、評価項目を設定し、全職員で各分掌や各担当毎に学校評価を実施をした。 その結果14項目でA（十分達成）、2項目でB（おおむね達成）評価だった。このことから、全体としては「良い結果であった」と考えられる。 ただし、細かく見ると、「評価項目毎の目標のハードルは妥当であったのか」「前年度の課題改善につながる目標だったのか」等の問題も含んでいるものと考ええる。今後は、さらに「課題把握～目標設定～具体的方策の策定～実践～検証～改善策の立案と実施」という流れを各担当者がしっかりと意識して、学校評価を行っていく必要がある。



5 総括表						
① 学力向上						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
学校運営	〇教職員の資質向上	授業研究会の充実及び指導法改善	・芙蓉校メソッドを取り入れた授業実践と授業研究会に取り組み、指導技術の向上を図る。	・研究の目標達成に向け、全員が授業実践を行う。 ・授業評価票の利用、KJ法による討議を行い、授業研究会を充実させる。 ・芙蓉校メソッドを取り入れた授業づくりを研究し、指導法を改善することで、授業力の向上を図る。 ・講師招聘による研修会を行う。	A ・研究の重点目標である「夢や目標を持ち、自己実現を目指す児童生徒の育成」を目指し、芙蓉校メソッドにキャリア教育の視点を取り入れた授業実践を全職員で行った。 ・研究授業では、授業評価票やKJ法による討議を行った、授業研究会を充実させた。 ・国立政策研究所の調査官を講師に招いて、研修会や授業研究会をおこなった。	・全職員が芙蓉校メソッドにキャリアの視点を取り入れた授業を実践した。そのことでキャリア教育への意識が高まり、また個々の指導力の向上も図れた。 ・今年度は、キャリア教育の「基礎的・汎用的能力」の自己理解・自己管理能力と課題対応能力について研究を深めてきた。次年度は、人間関係能力、キャリアプランニング能力についても研究を深めていく必要がある。
		職員研修の推進	・人権・同和教育、教育相談、特別支援教育、ICT教育等に係る校内研修会を実施する。 ・交通安全、セクシュアルハラスメント及びメンタルヘルスに係る研修会を実施し服務管理、健康管理を充実する。	・各担当者を中心に、実効性のある効果的な内容の研修会を企画させ、資質向上をめざす。 ・研修後の振り返りや意見交換を重視して、意識と知識を高めた資質向上をめざす。 ・服務や健康管理については、繰り返し研修や指導を行う。	A ・人権・同和教育、情報モラル、セクハラ、教育相談、特別支援教育、業務改善等、講師を招聘したり、校内で資料を作成したり、またグループでの話し合い、ふり返り・意見交換を取り入れながら研修を実施することができた。 ・研究発表会への参加要請がたくさん来たが、多忙出張旅費の問題があり、今後も参加については取捨選択が必要である。	・講師招聘による研修は、専門的な内容を学ぶ上で大いに役に立った。 ・グループでの話し合いを多く取り入れることで、実りのある研修を行うことができた。 ・研究発表会への参加要請がたくさん来たが、多忙出張旅費の問題があり、今後も参加については取捨選択が必要である。
教育活動	●学力向上	基礎学力の定着を目指した指導方法の工夫・改善	・NRTや学習状況調査等で全教科において県平均、全国平均を上回る。 ・NRTや学習状況調査等の分析を行い、実態と対応策を公表し、考えた対応策を実行する。	・立腰を始めとした学習の土台づくり。 ・学級活動との連携、自分向上プロジェクト等により学習習慣を定着させる。 ・すくすくテストを行う。 ・NRTや学習状況調査等の分析を行う。また、研修会を行う。さらに分析・実態・対応策をホームページ等で公表する。そして、その対応策を、各教科等と連携して実行する。	A ・小学1年を除く全ての学年にNRTテスト、AAIテストを実施することで、客観的に児童・生徒一人ひとりの学習状況把握し、支援を行うことができた。 ・立腰や自分向上プロジェクトは数年来継続しており、児童生徒の学習習慣の定着に大きく寄与していると考えられる。	・全体で見れば学習状況調査についてはおおむね県平均のとなったが、一人ひとりの個人差が大きく、発展的・総合的な問題の正答率を如何に上げるかが課題となった。
② 小中一貫した生徒指導と社会性の育成、およびキャリア教育の充実						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
学校運営	〇危機管理体制	教職員だけにとどまらず、児童生徒にも危機管理の意識を持たせる	・火災・水難・不審者に対する避難訓練を通して、学校生活における危険について、児童・生徒・職員の意識を高める。	・児童・生徒の安全に対する意識を高めるために、不審者対応や地震・火災などの避難訓練や交通安全教室の充実を図る。 ・集団下校などの際に防犯ブザーの携帯の指導を行う。	A ・不審者対応や 火災避難訓練を小中連携して時間を設定し、緊急時の行動について共通理解を図ることができた。 ・火災避難訓練の時には、危機管理に対する意識が高まった。小学部では防犯教室を行い、教師の寸劇とDVDの鑑賞もしたことにより、児童も興味を持つことができたようだった。 ・防犯ブザーについては、日頃より、携帯を呼び掛け、児童の意識を高めた。 ・児童・生徒へのアンケート調査では、登下校時の交通安全に対する意識が高まり、評価の平均も3.6となっている。	・不審者対応や 火災避難訓練に対する児童生徒の行動は、真剣なものであり、話も集中して聴くことができた。火災避難訓練の時には、危機管理に対する意識が高まった。小学部では防犯教室を行い、教師の寸劇とDVDの鑑賞もしたことにより、児童も興味を持つことができたようだった。 ・出張時などでも対応できるような組織づくりが必要である。 ・小学部では常に集団登校を、防犯ブザーの携帯が十分でなかったため、家庭へも呼びかけをしながらか危険防止に向けた指導を定期的に行い、児童生徒の防犯意識を更に高めていく必要がある。
教育活動	●心の教育	道徳の時間の充実 人権・同和教育の推進	・小中一貫した人権・同和教育の計画を立案、実践する。 ・ふれあい活動をおとして、自他を認め合い生命を大切に作る集団作りを実施する。	・道徳教育の年間指導計画の内容に沿った取りくみの推進に努め、その成果や課題について更に検討するとともに、工夫改善を行う。 ・Q-Uテストの結果をふまえて、構成的エンカウンターを実践する。 ・ふれあい道徳を実践し、家庭との連携した道徳教育を実践する。 ・小中一貫した人権・同和教育の推進を積極的に行う。 ・中学部では命と人権を考えるために月1回人権集会を実施する。	A ・中学部では、毎月の人権集会で、各月担当の先生が、人権・命についての講話を行い、人権・命について考える機会を設けた。 ・小学部、中学部それぞれで講師を招き、人権集会を行った。その講話により児童生徒は人権や命について深く考えることができた。 ・Q-Uテストを基に、学部ごとに、気になる児童生徒について共通理解を図り、具体的な手立てを話し合った。	・小学部では、平和集会や人権集会のあと、各学級で発達段階に応じて、事後指導を行っている。その中で、自分を振り返り、集会の効果を感じる感想が多くあった。 ・中学部では、毎月の人権集会後感想を書いたり、振り返りをしたりすることで人権意識が高まってきた。 ・小学部では、「思いやり」について指導する機会がたびたびあり、その場では共感することができているが、さらに、毎日の生活の中で生かせるように人権意識の高揚を求めていきたい。
教育活動	●いじめ問題への対応（生徒指導・教育相談）	小中一体となった生徒指導・教育相談の充実	・いじめや不登校児童生徒を出さない教育相談体制の確立と支援体制の強化を図る。	・隔週1回生徒指導委員会を開催し、児童生徒の生活の現状を把握し、対応すべき事案について話し合う。 ・月1回生徒指導協議会を開催して情報を共有し、改善策について検討し職員間の共通理解を図る。 ・いじめ問題の情報収集のためにアンケートを実施する。 ・学部集会や生徒朝会でいじめゼロの約束やいじめゼロ宣言を行い、いじめ防止の啓発を行う。	A ・小学部5年生と中学部2年生で、計画的にSCとの個人面談の時間を設けたり、SCによるエンカウンターを全学年で行ったりして、相談しやすい体制を作った。 ・中学部では、教育相談週間を設定し、各担任と生徒全員が面談を行った。また、全生徒に「つぶやきノート」を記入させることで、生徒の悩み等、早期発見・解決に努めた。 ・小学部では、教育相談週間を設定し、各担任と児童全員が面談を行った。また、毎月「〇月の心」を書く時間を設定し、児童の困ったことやうれしかったことを記入させることで、児童の悩み等の早期発見・解決に努めた。	・生徒指導協議会で児童生徒の現状を伝え合い対応を話し合うことにより、担任以外の多くの職員も児童生徒とのかわかりをもちやすくなった。 ・教育相談週間で、じっくり話を聞くことによって、信頼関係を築くことができた。 ・「〇月の心」や児童、保護者の話などで気になることがある時には、学級担任を含め複数の職員で話し合うことで、職員が連携して対応し、指導にあたることができた。
教育活動	〇児童会・生徒会活動	児童・生徒による主体的な活動の充実	・児童会、生徒会の組織を統合し、児童生徒による主体的な活動の機会を増やす。	・小（児童会）と中（生徒会）の交流の機会を増やして共通理解を図り、児童・生徒集会、学校行事で活動する。 ・委員会毎に児童集会を行い、活動実績を報告したり、全体への啓発をしたりする。 ・環境ISO活動等に積極的に取り組み、各委員会及び専門委員会の活動の活性化を図る。	A ・環境ISOではキックオフ宣言とゴール集会を合同で行い、小学部と中学部それぞれで環境ISOの活動を積極的に行った。 ・小学部は月1回委員会活動及び代表委員会を、中学部は月1回専門委員会及び本部役員会を行うことができた。 ・クリーンアップ作戦、体育大会、文化発表会では、小中合同で活動した。 ・小学部児童会では、代表委員会での話し合いをもとに、挨拶運動を行ったり、ドッジボール大会を企画したりして、よりよい学校を目指して活動した。	・小中合同学校行事では常にリーダー会や実行委員会を開き、目的意識をもたせたり、共通理解を図ったりして、小中9年間をつないだ円滑で充実した活動となった。 ・児童会の委員会の組織と、生徒会専門委員会の組織を統一することで、図書館まつりやクリーンアップ作戦などを協力分担して行うことができた。 ・小学部の代表委員会で決まった内容を、中学部にも共通理解を図って協力してもらうなど、小中の交流が活発に行われた。

特定課題	○キャリア教育・進路指導	社会的・職業的自立に向けて必要な意欲・態度や能力の育成	・9年間を通して、夢や目標を持ち、自己実現をめざす児童生徒を育てる。 ・地域での職場体験や農業体験を通して望ましい職業観・勤労観を育てる。 ・学習活動を通して、自己理解を深めさせ、自己の生き方を考えさせる。	・小学部の二分の一成人式（4年総合）やぼくの夢・私の夢（6年総合）、中学部の立志式（2年）等で自分自身や自分の将来について考えさせるとともに、特別活動（主に学校行事）における各学年や個人の役割を明確にし、全職員共通理解の downward 指導にあたる。 ・中学部では特別活動などで働くことや職業についての勉強を行い、進路の時間において農業体験（1年）、職業調べ（1年）、職業体験（2年）、高等学校についての学習（2年）、進路学習（3年）を系統的・計画的に行う。	A	・小学部では、教育相談週間を設定し、各担任と児童全員が面談を行った。 ・中学部では、農業体験、職場体験学習、立志式、高校調べ、進路学習、国際理解の学習を通して、自分と社会との関わりや将来の生き方について考えることができ、進路への意識や態度を養うことができた。 ・小学部においては、二分の一成人式（4年総合）やぼくの夢・私の夢（6年総合）等で自分自身や自分の将来について考えさせることができた。	・小学部においては、生活科・総合的な学習で、家族や地域とのかわりを体験的に学習させ、学年に応じた勤労観を育てることができた。また、4年生の「二分の一成人式」や6年生の卒業を節目ととらえ、夢や職業について考える機会を設けることができた。 ・中学部では、農業体験、職場体験学習、立志式等について、さらに計画を見直し、学校教育全体でのキャリア教育に取り組んでいきたい。 ・校内研究で取り組んでいるため、職員の意識が高まってきた。
特定課題	○幼・保・小連携	基本的な生活態度・学習態度の定着	・幼保小中連絡会を年3回開催し、基本的な生活習慣、学習習慣に関する共通認識を持ち、スムーズな移行につなげる。	・年3回実施する幼保小中連絡会の中で、幼稚園教諭、保育士、学校教諭が協議をし、互いに理解を深める。 ・2、3学期に児童と園児が一緒に活動する場を設定し、児童、園児、職員の交流を深める。	A	・交流会や連絡会として、来年度入学予定園児の情報を得ることができた。 ・継続的に情報交換することで、児童の指導に生かすことができた。	・交流会を設定したり、お知らせ等を持ち回りに持っていったりすることで、園児から声をかけられることが増え、園児理解につながった。 ・小学校ではお世話されるばかりの1年生が、交流会において年長児の世話をする立場になることで、進級への意識を持つことができた。
③ 開かれた学校づくり							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由		成果と課題
学校運営	○開かれた学校づくり	教育情報の発信	・学校便りやホームページを利用して、保護者や地域に向けて情報を発信する。	・HPの定期更新するとともに、学校行事等のコンテンツを充実させる。 ・学校便りを公民館に掲示してもらい、児童生徒の様子や学校の取組を地域に伝えていく。 ・育友会や地域教育推進会議などで学校の様子を伝える。	B	・HPの更新は、定期的に行うことができたが、給食・保健室等の便りは紙媒体だったので更新が上手くいかなかった。 ・学校行事等の写真をこまめに出すことができた。	・学校便りは、データでもらえたのでHPにアップすることができ、紙媒体で出される便りは、見落とすことが多く定期的に載せることができなかった。 HPに載せる便りもデータでもらうようにしたい。



本年度の重点目標に含まれない共通評価項目							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由		成果と課題
学校運営	○小中一貫教育	小中一貫教育の充実・推進	運営機構の機能について検証を行い、9年間を見通した教育計画の実践を進めながら見直しを行う。	・校務分掌において小中共通化を推進し、スリム化を図る。 ・企画委員会や各種の全体会等で、運営機構が有効に機能しているかについて検討する。 ・小中一体となった教育活動を推進するために、月1回以上の研修会や連絡会を開く。	A	・校務分掌を小中で共通できるところは行い、分担できるところは分担し、業務をスリム化することができた。 ・企画委員会等で運営機構を全体へ機能できるように努めた。 ・職員会議、校内研究、生徒指導協議会を計画的に行うことができた。	・校務分掌において、小中共通化、仕事の分担はかなりできたが、個々の教師の仕事量の調整が多少不十分であった。 ・次年度は、特に、企画委員会等で運営機構について検討を継続する必要がある。
教育活動	●ICT利活用教育の推進	ICT利活用教育の実践	・ICT利活用教育についての共通理解を図るとともに、授業実践を行う。	・ICT利活用についての研修会を実施する。 ・ICT機器を活用した授業実践を日々行っていく。	A	・校内で使用するICT機器の活用に関するミニ研修会を数回行った。 ・校内研や普段の授業の中で、ICT機器を活用することができた。	・電子黒板のデジタル教科書や付属の書画カメラを、授業で効果的に活用できている。 ・タブレットの使い方の研修会を行なったが、活用機会が少ないため、今後も有効に活用できるように支援していく必要がある。
教育活動	●健康・体づくり	健康教育の推進及び健康な体づくり	専門的な知識を持つ養護教諭・学校栄養職員と担任が連携した授業を行ったり、集会等で時期に合った話をしたりして、健康な食生活や体づくりへの関心を高める。児童・生徒アンケートの4段階評価で3.5ポイント以上	・健康教育・食育について、担任と養護教諭や栄養職員とのPTによる授業実践を行う。 ・年間計画を活用し、全職員で保健指導にあたる。 ・健康・体づくり推進プランにそって、体育科教育、食育等を関連させた指導を行う。	A	・健康を維持向上させるための重要事項「適度な運動」「十分な休養・睡眠」「バランスのとれた食習慣」を保健授業で取り扱い、発達期にある今の時期を大切にすることの意識を高めた。 ・体づくりでは、体育の授業を通して体力を高める運動や中学生時期が全身持久力（心肺機能）を高める最適な時期であることを紹介し、毎日継続して取り組むよう啓発した。 ・小学部では、外遊びを奨励したり、冬のマラソン月間を設定したりして、児童の体力作りに努めた。	・健康・体づくりでは、必要性や取り組み方法を学び、意識して取り組み始めた生徒もいる。特に風邪対策についてはほとんどの生徒がマスクを着用するなど意識は高い。 ・全体的に柔軟性が低い。毎日、継続して取り組めるように簡単に取り組める運動を精選して紹介したい。 ・体力の2極化が見られるので、運動能力テストでのE判定児童への手立てを考えていく必要がある。
特定課題	●小学校低学年の学習環境の改善充実	低学年児童の基本的な生活習慣・学習習慣の育成	・学校のきまりを理解させ、けじめのある学校生活を送らせるとともに、望ましい学習習慣を身につけさせる。	・低学年指導に関する計画書をもとに学校における望ましい生活態度・学習態度を身につけさせる。 ・帰りの会などで、自分の1日の生活のふりかえりを行い、改善への意識を高める。	A	・低学年の基礎基本を身につけさせ、意欲的に学んだり、友達と交流したりしながら、明るい学校生活を送ることができた。 ・帰りの会などで、生活のふりかえりを行うことで、自分のできたことやできなかったことを反省し、これからどうしていけばいいのかを考えることができた。	・全体的に落ち着いて学習できている。発表することに慣れてきたが、小さな声で発表したり、集会や行事などの大勢の場では恥ずかしがったりする児童がいるので、堂々と発表する力をさらにつけていきたい。 ・生活態度では、友達と仲良くできる反面、相手の気持ちを考えない言葉遣いや自己中心的な考え方で、トラブルになることがあったので、今後も指導を続けていきたい。
特定課題	○特別支援教育	特別支援教育体制の確立	・特別支援教育委員会を設置し、支援を要する児童生徒について、個別的教育支援計画と指導計画を作成する。 ・小中一貫した指導体制で、小中が連携した特別支援教育を行う。	・支援が必要な児童生徒に対し、特別支援教育委員会で児童生徒の困り感を解消、または軽減するための支援方法を話し合い、共通理解を持つ。 ・個別的教育支援計画、個別の指導計画を作成し、関係機関と連携した支援を適切に進める。 ・小中の特別支援教育コーディネーターが企画をし、必要に応じて特別支援教育委員会・就学指導委員会を小中合同で行う。	A	・専門機関との連携で、個別に支援会議を定期的に実施し、具体的な支援内容を決めて実践した。 ・来年度中学部自閉症・情緒学級立ち上げについて、小中合同で受け入れ体制を話し合い、準備を進めた。また、情緒学級児童の中学進学については早めに学校見学を行い、情報収集を行った。 ・小学部1年生児童については、支援を要する児童が複数いて、級外と連携して支援に当たった。	・知的学級と情緒学級で情報交換や連携を図り、指導計画の話し合いを行い実践した。 ・通常学級に在籍する支援が必要な児童については、特別支援担当や級外を含めて支援に当たり、一定の効果を上げることができたが、もっと手厚い支援を進めるために、生活指導員の配置が望ましいと考える。
特定課題	○環境教育	環境教育の充実	・環境についての学習を通して環境問題への関心を高める。 ・児童会、生徒会活動による主体的な取り組みを通して、身近な環境を守っていかうとする行動力を育てる。	・各委員会及び各専門委員会で環境ISOの目標をたて、環境ISOキックオフ集会を行った後、その目標に向かって活動する。また、その活動を振り返り、ゴール集会で発表する。 ・蓮池町での清掃活動を自分たちで計画し、全校生徒で行う。	A	・小中合同で環境ISOキックオフ集会を行い全児童・生徒の環境に対する意識を高めることができた。 ・各委員会及び各専門委員会がそれぞれ環境改善に向けての目標を独自に立て、自主的・自治的な活動を行った。 ・小学部は学期末に、中学部は週に1回、掃除の重点箇所を呼びかけて清掃活動を行った。 ・小学部・中学部合同で、蓮池町内の清掃活動を行った。	・環境ISOゴール集会で、今年度の取り組み成果、次年度の課題について発表をし、小中での共通理解を深めることができた。 ・小中の各委員会が、クイズや新聞、ポスターなどの表現方法を工夫して全校に呼びかけ、目標達成に向けて自主的に活動できた。 ・清掃強化週間を立て、重点箇所に対し全員で取り組み意識して清掃活動に取り組むことができた。 ・町内清掃活動により環境美化を意識づけるよい機会が持てた。

評価結果を踏まえて、「何ができて、何ができなかったのか」を考える
特に、C、D評価はもとより、A、B評価も、「評価項目として適切だったのか」は吟味の余地がある



6 総合評価

・評価項目については前年度とほぼ同じ内容で設定し、全職員で各分掌や各担当毎に学校評価を実施をした。その結果 15項目でA（十分達成）、1項目でB（おおむね達成）評価だった。
・全体としては目標が達成できたが、「評価項目の難易度は妥当であったのか」「P-D-C-Aサイクルで改善できたのか」等の問題も含んでいるものと思う。今後も、さらに「課題把握～目標設定～具体的方策の策定～実践～検証～改善策の立案と次年度への引き継ぎ」という流れで、学校評価を行っていく必要があると考える。

↓「できなかった」点について、次年度以降の具体策を検討する
↓「できなかった」こと自体よりも、改善策を見出せるかが重要である

7 来年度の改善策

・今年度の「成果と課題」を次年度担当者に引き継ぐようにすること。
・主任等の担当者一人に任せることなく、チーム(グループ)で協力して評価にあたること。特に、結果の総括に検証については、各チームで「アンケートや聞き取り等を実施するなど、客観性のある結果を導き出す方策」を考えていく必要がある。
・実践の途中で「具体的方策の進捗状況」と「中間結果の把握」等を可能な限り行うようにすること。
・前年度の課題でもあったが、具体的目標の設定に当たっては、数値目標やわかりやすい成果指標を示し、具体的な方策を立てて実践していくこと。